

『クリスマス・キャロル』論

— 生と死 —*

井 原 慶 一 郎

イントロダクション (ディケンズとドストエフスキー)

ディケンズ (1812~70年) はドストエフスキーのことを知らなかったが、ドストエフスキー (1821~81年) はディケンズの熱心な読者だった。ドストエフスキーはディケンズの主要な作品のほとんどをロシア語訳やフランス語訳で読んでいた。彼は、ディケンズについて、小説、エッセイ、書簡、ノートなどのなかでたびたび言及している。ディケンズがドストエフスキーに文学的な影響を与えたことは間違いない¹。

ローラリー・マクパイクは、『ドストエフスキーのディケンズ——文学的影響に関する研究』において、ディケンズがドストエフスキーに与えた影響から逆にディケンズを読み直す視点を提供している²。私がこの論文でやろうとしているのもそれに似た試みである。すなわち、『カラマーゾフの兄弟』(1879~80年) から『クリスマス・キャロル』(1843年) を読み直す。ただし、私が述べるのは、両者の影響関係についてではなく、両者の類似性についてである。

『クリスマス・キャロル』には、『カラマーゾフの兄弟』で扱われているい

* 筆者は、「鹿児島英語英文学会 第8回大会」(2001年11月24日)において、この論文の要旨を発表した。

¹ ディケンズがドストエフスキーに与えた文学的影響については、Angus Wilson, "Dickens and Dostoevsky" (1970), *Diversity and Depth in Fiction* (ed. Kerry McSweeney), The Viking Press, 1983, pp. 64-87, 及び N. M. Lary, *Dostoevsky and Dickens: A Study of Literary Influence*, Routledge and Kegan Paul, 1973を参照されたい。

² Lorelee MacPike, *Dostoevsky's Dickens: A Study of Literary Influence*, Barnes & Noble Books, 1981.

くつかのテーマが凝縮されたかたちで示されており、前者は後者のミニチュアとして読むことができる（ただし、後者がシリアスであるのに対して、前者はポップである）。なぜそうなのか。一方は、クリスマス（キリスト）の精神を描こうとしており、もう一方は、現代のキリストを描こうとしているからである。だが、それをいうには同じ宗教観が前提とされなければならない。

一言でいえば、彼らは同じ「イエス主義者」であった。つまり、彼らが信じていたのはイエスその人の言行であって、キリスト教の教義一般ではない。たとえば、ドストエフスキーは、晩年のノートの中かでイエスについてつぎのようにいっている。

道徳性というものを、自分の信念への忠実さと定義するのでは足りない。それ以上に絶えずこういう問いを自分でかき立てなければならない。つまり「自分の信念は確かなものであろうか」という問いを。信念の判断基準は常に一つ、すなわちキリストである。だがこれはもはや哲学ではなく、信仰であり、そして信仰とは赤い花だ。……「キリストも過ちを犯した。それは証明されている！」と言うかもしれない。しかし私の燃える感情はこう告げる。「いや私はあなた方とともにいるよりも、むしろ過ちとともに、キリストのもとに残りたい。」³

ドストエフスキーは、『作家の日記』（1876年6月）の中かで、ディケンズのことを「偉大なキリスト教徒」と呼んでいる。また、ディケンズは自分の子供たちのためだけに『キリスト伝』を書いている⁴。ディケンズとドストエフスキーは、イエスを通じてつながっているのである。

両者のリアリズム観の類似はおそらくここからきている。つまり、現実のなかに見出される人間の理想的な行い——それらを一身に体現した人物をリアルだと思うかどうか。言い換えれば、人間の真の理想としてのイエスをリアルだ

³ バフチン『ドストエフスキーの詩学』から引用した（200ページ）。

⁴ *The Life of Our Lord* は、1846年に書かれ、ディケンズの死後、1934年に出版された。

と思うかどうか。ディケンズとドストエフスキーにとって、現実に実在しうる理想は、現実に実在する人物とまったく同じように現実的である⁵。そのことが彼らの文学の本質を決定しているといつてよい。

『クリスマス・キャロル』の構成は、第一節「マーレーの幽霊」、第二節「第一のクリスマスの精霊」、第三節「第二のクリスマスの精霊」、第四節「最後のクリスマスの精霊」、第五節「これでおしまい」である。第一節で、マーレーの幽霊によって、これから三人の精霊が順番にスクルージを訪れるということが予告されるが、その三人の精霊とは、過去・現在・未来のクリスマスの精霊にほかならない。『クリスマス・キャロル』は、一言でいえば、守銭奴のスクルージが、過去・現在・未来のクリスマスの精霊に出会って改心し、一晩(12月24日⇒25日)で慈善家になるという話である。この論文では、『クリスマス・キャロル』の構成にしたがって、第一章で「過去」、第二章で「現在」、第三章で「未来」を取り上げ、この作品の最重要テーマである「生と死」の問題について考えてみたい。

I 過去——「幼な子の如くあれ」

第一のクリスマスの精霊は、「過去」のクリスマスの精霊である。「過去」とは、自分の子供時代にほかならない。

スクルージは、「過去」のクリスマスの精霊とともに、自分の子供時代をふりかえる。そして、作品の最後では、生まれかわって子供のようになる。《「今日はいったい何月何日なんだろう。精霊たちと何日くらい付き合っていたんだろう。全然わからない。生まれたばかりの赤ん坊と同じで、何にもわからない。でも、かまわんさ、気にしない、気にしない。赤ん坊になりたいくらいだ!」》

⁵ 《ディケンズは単に現実の理想を取り上げたただけであっても、その人物は現実に実在する人物とまったく同じように、現実的なのである》(ドストエフスキー「展覧会に関連して」『作家の日記』1、小沼文彦訳、ちくま学芸文庫、1997年、227ページ)。

(『クリスマス・キャロル』, 151ページ)。したがって、スクルージにとって重要だったのは、子供の心を取り戻すことである。

「子供」という言葉は、人を形容する際、否定的にも肯定的にも使われる。ネガティブな意味で「子供っぽい」(childish) といったり、ポジティブな意味で「子供のような」(childlike) といったりする。この意味で、「子供」は両義的である。とりあえず、前者を、啓蒙されていない状態を表す形容詞、後者を、子供が本来持っている善い性質を保持している状態を表す形容詞であると理解しておく⁶。

子供の本性については、さまざまな議論がなされているが、大きく分ければ、性善説、性悪説、中立説のいずれかである。性善説によれば、子供は善い性質(それが発現する可能性)を生まれつき持っているのだから、それらを損なわないようにしなければならない。性悪説によれば、子供は生まれつき性悪^{しょうわる}だから、厳格な教育を施さなければならない。また、中立説によれば、生まれたばかりの子供の心は「白紙状態 tabula rasa」(ロック)であり、環境や教育によって善くも悪くもなる。

キリスト教では、原罪思想(人間は生まれながらにして罪を背負っている)から、一般に、性悪説の立場をとっているが、『福音書』を読むかぎり、イエスは性善説の立場をとっている。たとえば、「幼な子の如くあれ」というイエスの有名な言葉がある。「マタイ福音書」第十八章から引用する。

その時、弟子たちがイエスの所に来て、「ではいったいわれわれのうちのだれが天の国で一番えらいのですか」とたずねた。イエスは一人の子供を呼びよせ、彼らの真中に立たせて言われた、「アーメン、わたしは言う、あなた達は生まれかわって子供のように小さくならなければ、決して天の国に入ることはできない。だから、この子供のように自分を低くする者、

⁶ カントによれば、啓蒙とは、「人間が自分自身に責めのある未成年状態から脱出すること」であり、具体的には、「自分で思考すること」、「他人の立場になって思考すること」である(磯江景孜『啓蒙とは何かという問いに対する回答』『カント辞典』, 弘文堂, 1997年, 143ページ)。

それが天の国では一番えらい人である。」(『福音書』, 125ページ)

ここでは、「自分たちのうちで誰が一番えらいか」について弟子たちがイエスに尋ねたということになっているが、「マルコ福音書」第九章では、イエスが弟子たちを叱ったということになっている⁷。

カペナウムに来た。家につかれるとイエスは、弟子たちにお尋ねになった、「道々何を評議していたのか。」彼らは黙っていた。自分たちのうちでだれが一番えらいかと、道々論じ合っていたからである。イエスは坐って、十二人を呼んで言われる、「一番上になりたい者は皆の一番下になれ、皆の召使になれ。」それから、一人の子供の手を取って彼らの真中に立たせ、それを抱いて言われた、「わたしの名を信ずる一人のこんな子供を迎える者は、わたしを迎えてくれるのである。わたしを迎える者は、わたしを迎えるのでなく、わたしを遣わされた方をお迎えするのである。」(『福音書』, 38ページ)

弟子たちはこのイエスの言葉がよく理解できなかつたようである。なぜなら、後日、イエスからまったく同じ言葉で叱られているからである。

イエスにさわっていたただこうとして、人々が子供たちをつれて来ると、弟子たちが咎めた。イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた、「子供たちをわたしの所に来させよ、邪魔をするな。神の国はこんな小さな人たちのものである。アーメン、わたしは言う、子供のようにすなおに神の国の福音を受け入れる者でなければ、決してそこに入ることはできない。」

⁷ 滝澤武人はつぎのように書いている。《マルコはきわめて個性的な福音書であり、原始キリスト教団の主流派を痛烈に批判しながら、イエスのように生きるべきことを懸命に呼びかけている。……反主流派的なマルコの主張に修正を加えながら、それぞれの信ずる正統的・教会的な立場からイエスをとらえなおすこと、それがマタイとルカの使命であった》(『人間イエス』, 講談社現代新書, 1997年, 31-2ページ)。

それから子供たちを抱き、頭に手をのせて祝福された。(「マルコ福音書」第十章『福音書』, 40ページ)

実は、うえで引用した「マタイ福音書」第十八章のなかの一節が『クリスマス・キャロル』のなかで引用されている。《「そしてイエスさまは子供を抱いて、人びとの間に……」》(138ページ)。これは、未来のクリスマスの情景のなかで、登場人物のピーター君が、炉辺で聖書を朗読する場面である。母親が涙ぐんだので途中で読むのをやめてしまうが、それは亡くなった息子のティム坊や(ピーター君の弟)のことを思い出したためである。

このティム坊やが、イエスが弟子たちの真中に立たせた、あの『福音書』のなかの子供の具体化されたイメージであることは間違いない。ティム坊やは、実際に、小さく、病弱であるだけでなく、自分を低くし、すなおにキリスト(救世主)の名を信じている。たとえば、父親のボブ・クラチットは、現在のクリスマスの情景のなかで、ティム坊やと教会から帰ってきた後、息子についてつぎのようにいう。

「……長いこと一人で座っていると、どういうわけか考え込んでしまったんだね。妙なことをいろいろ考えたらしい。帰り道にこんなこと言うのさ。足の悪いぼくをみんながクリスマス日に教会で見るのはいいことだね、聖書に出てくるイエスさまの奇跡で、足の悪い乞食が歩けたり、盲人の目が見えるようになる話を思い出すことができるからね、だってさ」(『クリスマス・キャロル』, 94-5ページ)

こんな子供はいるはずがない・子供を美化しすぎているという批判もあるかもしれない。しかし、描かれているのは、肉体を持った観念であると考えればよい(観念的であるからといって、リアルではないということにはならない)。重要なのは、経験的なリアリズムにこだわることなく、その登場人物のエッセンス(本質)をつかむことである。ティム坊やは、『福音書』のなかの子供と

いう観念の受肉なのである⁸。

そこで、イエスの言葉に戻れば、子供とは、第一に、小さい者であり、第二に、すなおに神の国の福音を受け入れる者である。したがって、「子供のようになる」とは、まず、小さな子供のように自分を低くすることであり、次に、すなおに神の国の福音を受け入れることである。

第一の点についていえば、イエスは、他のメンバーに対して^メ上位レベルに立つことを禁止しているだけではなく（なぜなら上位レベルに立つことができるのは神だけだから）、そもそも自分と他人を比較してどちらがえらいとか、どちらがより天国にふさわしいとか、お前らが決めるなどといったように思われる。それは（唯一上位レベルに立つことができる）神のみが決定しうることだからである。

ただし、子供は実際に小さい者であり、ことさら自分を低くしているわけではないから、子供が本来持っている善い性質について考えるとき、重要なのは、第二の点である。では、「すなおに神の国の福音を受け入れる」とはどういうことか。

たいていの子供は、自分たちにふさわしいとされている神の国（天国）について何も知らないし、考えたことすらない。したがって、すなおに神の国の福音を受け入れるとは、むしろ神の国（あの世）について何も考えないということである。要するに、子供は、死ぬことに関して無心なのである。逆にいえば、生きることを純真に信じている。

この意味で、子供が本来持っている善い性質とは、絶望しない（生をあきらめない）ということである⁹。われわれは、自分はなぜ生きているのかと問う

⁸ 私は以前つぎのように書いた。「ディケンズは、観念（アイデア）を《物質的・肉体的次元へと移行させること》〔バフチン〕によって主要な登場人物を創造した。つまり、ディケンズの作品の登場人物は、アイデアの人、いいかえれば、格下げされ、“現実”（下位レベル）に存在するアイデアである」（「大江健三郎とディケンズ—『キルプの軍団』を中心に—」鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』第51号、2000年、182ページ）。

⁹ 『クリスマス・キャロル』には、絶望しかけている二人の子供（「無知」と「貧困」）が登場する（117-20ページ）。子供を絶望させるとすれば、それは大人の責任である。

前に、すでに生きている。それまでのあいだは、子供である。いいかえれば、すなおに神の国の福音を受け入れる者である。したがって、「幼な子の如くあれ」とは、かつてそうであったように、「死に関して無心であれ、ただ生のみを考えよ」ということにほかならない。

ところで、浅田彰は、『逃走論』のなかで、「パラノ型」と「スキゾ型」という二つの人間のタイプについて述べている。

パラノってのは^{パラノイア}偏執型のことで、過去のすべてを^{インテグレート}積分＝統合化して背負ってるようなのをいう。たとえば、十億円もってる吝嗇家が、あと十万、あと五万、と血眼になってるみたいな、ね。それに対し、スキゾってのは^{スキゾフレニー}分裂型で、そのつど時点ゼロで^{ダイファレンシエート}微分＝差異化してるようなのを言う。つねに「今」の状況を鋭敏に探りながら一瞬一瞬にすべてを賭けるギャンブラーなんかが、その典型だ。

さて、もっとも基本的なパラノ型の行動といえば、「住む」ってことだろう。一家をかまえ、そこをセンターとしてテリトリーの拡大を図ると同時に、家財をうずたかく蓄積する。妻を性的に独占し、生まれた子どもの尻をたたいて、一家の発展をめざす。このゲームは途中でおりたら負けだ。「やめられない、とまらない」でもって、どうしてもパラノ型になっちゃうワケね。……ところが、事態が急変したりすると、パラノ型ってのは弱いんだな。ヘタをすると、砦にたてこもって奮戦したあげく玉砕、なんてことにもなりかねない。ここで「住むヒト」にかわって登場するのが「逃げるヒト」なのだ。コイツは何かあったら逃げる。ふみとどまったりせず、とにかく逃げる。そのためには身軽じゃないといけない。家というセンターをもたず、たえずボーダーに身をおく。家財をためこんだり、家

イエスはこういっている。《「この世は罪のいざないがあるから禍だ、罪のいざないの来るのを避けることができないからである。しかしいざないを来させる人は禍だ」。《わたしを信ずるこの小さな者を一人でも罪にいざなう者は、大きな挽臼を首にかけて深い海に沈められる方が得である》（「マタイ福音書」第十八章『福音書』、125ページ）。

